

2020年度しあわせ研究

薬師寺・佛足跡歌碑の研究 I

一碑面上半部に刻された書と
その内容について

研究員 廣瀬裕之、漆原徹
遠藤祐介



薬師寺・佛足跡歌碑前にて▲

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記3人の共同研究の成果発表であり、第4回目の研究論文である。「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し、書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきたものである。2017年度は薬師寺佛足石「正面銘文刻」、2018年度は同「左側面銘文刻」、2019年度は同「背面銘文」の調査研究を行い、それぞれ『武蔵野教育学論集』第4・6・8号に研究論文として発表してきた。2020年度は、コロナ禍のため、現地での調査研究が危ぶまれたが、時期を検討して探訪し、今年度からは新たに佛足石の隣に現存する国宝「佛足跡歌碑」の研究に着手した。昨年までと同様に拓本と原刻および写真による照合調査から書線の確認・検討を行い、今回は、碑面上半部に刻された銘刻の書としての正確な復元および判りやすい訳と、その背景の研究を試みた。お蔭様で薬師寺における佛足石関連の調査を開始して4年目となる。今回佛足跡歌碑の調査研究のための許可依頼を申請したとき、初めて寺院側の宝物研究担当の方から、「お目にかかりたい」と逆に依頼があった。私たちの研究論文をよくお読みいただいているとのことで、薬師寺の応接室でいろいろな意見交換ができたことが喜び

であった。閉門後の堂内での原石刻面調査は以前させていただけたことがあったが写真撮影は禁止であった。今回は、宝物研究担当の方と同行のもと、原碑刻面調査ができただけでなく、碑面の写真撮影も許可していただいたことには驚きと感激でいっぱいであった。ご厚意に深く感謝したい。

古代の薬師寺佛足石以外の佛足石については、従来近世以降のものしか存在しないという理解が一般的であったが、私たちは、その間の時代、つまり近世になる前(中世)の佛足石探しも大きな研究テーマの一つとして進めているが、今回も京都・奈良を探訪した結果、中世のものと推定できる新たな2つの佛足石の存在を発見することができた。前回までの研究で、中世の佛足石が京都法然院、安土城、大阪泉南市林昌寺と中世の可能性が高い粉河寺のものを確認してきたが、今回は京都の安楽寺と銀閣寺にも寺院の人さえ知らない中世の佛足石が存在することが判明したことが今回の調査探訪の大きな成果であった。

薬師寺佛足跡歌碑の銘文については、和歌としてだけではなく、万葉仮名の実物としても有名である。その復元によって、この書美を忠実に再現することができたことも大きな成果といえる。私たちの共同研究は、従来の研究を着実に前進させているといえよう。本成果は、『武蔵野教育学論集』第10号(2021年3月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行)に掲載する。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていきたい。